

発刊にあたって

近年における米の過剰を解消するために、昭和45年から生産調整対策が実施されました。しかし、その後も依然として過剰基調は変わらず、稲作転換政策の強化がなされました。とくに、北海道については良質米の安定生産上不利な地域として全国平均を上回る転作率が傾斜配分され、一時期には45%を超えるに至りました。

このような状況は北海道稲作の存立にかかわることであり、稲作農家はもちろんのこと稲作関係者にとって最も憂慮される問題となりました。

道立農試の水稲育種担当者は昭和54年再三にわたり打合せを行い、府県産米に匹敵する良質良食味品種の早期開発がこれらの問題に対応する緊要なこととして、育種目標、育種計画の検討を致しました。

これと併せて、生産者、農業団体等からも良食味品種の早期開発が強く要望されるに至り、北海道農務部はこれを受けて昭和55年「優良米の早期開発」課題の道費予算を措置しました。当時としては、一試験課題として例をみない超大型予算であり、並々ならぬ意気込みを感じました。

昭和55年、水稲育種関係4場（中央、上川、道南、北見）よりなるプロジェクトチームを編成し、61年までの7年計画で、府県産米に匹敵する良質良食味品種の早期開発を目標に①育種規模の拡大、②沖縄・鹿児島等の暖地利用あるいはバイオテクノロジーのひとつである蒴培養活用による育種年限短縮、③機器による早期世代での品質選抜などをはかりながら、チームメンバー一丸となって早期開発に取り組みました。この間、農務部、農業関係団体の絶大な御理解と御支援をいただきました。

昭和61年度で本課題は終了しましたが、この間、「しまひかり」（昭56）、「みちこがね」（昭57）、「ともひかり」、「キタアケ」、「たんねもち」（以上昭58）、「ゆきひかり」（昭59）、「空育125号」、「上育393号」、「上育394号」（以上昭62）の9品種が育成され北海道奨励品種として採用されました。

これらの品種は北海道における主要作付品種としての位置を着々と築きつつあり、その作付割合の合計は71%を占めるに至っており、北海道産米の食味水準の向上に大きく貢献してあるものと確信しています。

本課題の終了にあたり、7年間の「優良米早期開発」試験の経過と成果を広く関係の皆様参考に供すべく資料としてとりまとめた次第です。北海道稲作の一層の発展のために本資料を御活用いただければ幸いです。

昭和63年4月

北海道立中央農業試験場長 森 義 雄

編集総括
仲野博之*

編集委員長
佐々木多喜雄**

編集委員

三分一 敬** 関口久雄**
佐々木 一男*** 相田隆男**

* 上川農業試験場
** 中央農業試験場
*** 遺伝資源センター